



羽田八幡宮文庫について

田崎哲郎

羽田八幡宮文庫は江戸時代に本の貸出しを制度として行っていた唯一の文庫として、図書館史の研究者間に知られている。JR豊橋駅西口から北西に数分、羽田八幡宮参道の右側に蔵が1つ見える。嘉永元(1848)年に作られた羽田八幡宮文庫の書庫の建物であり、神主羽田野敬雄の住宅・門と共に現在登録文化財になっている。

この年の3月吉田(豊橋)の町の商人達が俳句の会で集まった折、福谷世黄が3,000冊の本を集めたがどう保存したらよいかと発言、伊勢神宮の文庫に倣って羽田野の神社に文庫を置いてはということになった。商人達が協力して187両余を集め、6月に藩の許可を得て、縦2間に横3間の書庫が神主の屋敷に建てられた。現在の位置は当初と若干異なるが、書庫の周りにあった防火用水路の一部が残っている。運営は羽田野を中心に数人の文庫幹事が当たった。本は世話人達がその人脈を使って各方面から寄贈してもらったものが多く、公家の三条実萬からの『類聚国史』、『御注孝経』、水戸の斉昭からの『破邪集』、吉田藩主からの『四書大全』、『皇朝史略』などもある。幹事自身も寄付しており、中でも羽田野は嘉永7年8月迄に600部を、饅頭屋の主人佐野蓬守は文久元(1861)年春迄に1,000巻を寄贈した。本は刊本のみならず写本も多く、羽田野の手になるものも少なくない。

本は次第に増加し、安政2(1855)年春には1,500余巻、文久元(1861)年6月には1,686部7,867巻、慶応3(1867)年には10,000巻を越えた。明治9(1876)年の蔵書目録には2,515部10,357巻とある。羽田野は本居大平に入

門の後、文政10(1827)年三河で最初に平田篤胤の門に入った国学徒だったのでその方面の本が特に多いが、平田家を出した篤胤の本はかなり寄贈されている。なお種痘関係など翻訳洋書が種々あるのも注目される。

書庫入口両脇に庇が作られそこで本が読めたが、安政3年に松陰舎という建物が建てられ、ここでは国学者の大国隆正や藤森弘庵による講義も行われた。大国は著書で伊勢神宮の林崎・豊宮崎両文庫、熱田神宮の文庫と並べてこの文庫に言及している。貸出しの開始時期は不明だが、貸出用の蓋付の箱が4個確認されており、蓋裏に2部10巻まで1月以内貸す旨書いてある。1月と期間が長いのは本を写すことを考慮しているのだろう。貸出し事務がどう行われたかは分からないが、虫干しは毎年6月に幹事が実施しており、近くに火事があると馳せ参じている。運営の自主性を含め近代的図書館の先駆と捉えられるではなからうか。

幹事達は延喜式に出てくる東三河の神社(式内社)に道標を建てたり、安政地震の時、潰家に物資を贈ったり、『きぎんのころろえ』という本を印刷して無料配布したりと社会的活動も行った。

明治になり神社は保護を失い、羽田野が明治15年に死亡、佐野も同28年に没した。同40年に書籍は名古屋へ売却されたが、大木智治らの努力で8,710冊が買い戻され、それが市図書館建設の基となり、現在に至っている。

市中央図書館の2階には文庫についての展示があります。一度訪ねてみてはどうでしょうか。

編集・発行

愛知大学図書館

2007年11月15日発行 No. 34

- 豊橋図書館 ㊦441-8522 豊橋市町畑町字町畑1-1 ㊦(0532) 47-4181
 - 名古屋図書館 ㊦470-0296 西加茂郡三好町黒笹370 ㊦(0561) 36-1115
 - 車道図書館 ㊦461-8641 名古屋市東区筒井二丁目10-31 ㊦(052) 937-8116
- URL <http://library.aichi-u.ac.jp>